

ISMCS conference 2018開催報告

東京大学大学院医学系研究科心臓外科

小野 稔

Minoru ONO



2018年10月31日から11月2日まで、国際機械循環補助学会 (International Society for Mechanical Circulatory Support, ISMCS) 第26回学術集会を東京お台場にある Hilton ホテルで開催した。本学会は故能勢之彦先生によって創設され、長く ISRBP (International Society for Rotary Blood Pumps) と呼ばれていた。2017年に名称を正式に変更してから2回目の学術集会であった。山崎健二先生が大会長を務められた第56回日本人工臓器学会大会と同時開催で行われた。山崎先生とはご縁があり、筆者が2013年の第51回日本人工臓器学会大会を開催したときには、同時開催で山崎先生が第21回ISRBPを主催された。今回はつまり、2013年と立場が逆になっての同時開催であった(図1, 図2)。

山崎大会長と相談のうえ、学会のテーマを「DREAM IS ALIVE」として両学会で共通にすることにした。植込み型補助人工心臓 (iVAD) のデバイスの進歩、成績の向上は著しく、新規開発・臨床導入のためのハードルはどんどん高くなりつつある。しかしながら、パーフェクトなデバイスには未だほど遠く、この気が遠くなるような理想のデバイスに向けた「夢」をあきらめないで、前に進み続けようという思いが結実した結果としての共通のテーマであった。期間中は晴天に恵まれ、気候も極めて温暖であった。ともすれば、会場の外へいざなわれそうな陽気であったが、多くの参加者が熱い議論を最後まで交わしていた。iVADを中心とした様々な循環補助装置や関連技術の最先端を作り、それを臨床で駆使し、改善をフィードバックするという本学会のメンバーの強いバイオニア精神が健全に開花していた。

■ 著者連絡先

東京大学大学院医学系研究科心臓外科
(〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1)
E-mail. minoruono61@gmail.com

演題応募は17か国からあり、20のセッション(口演16, ポスター4)で136題(招請講演等22題, 一般口演85題, ポスター発表29題)の発表があった。招請講演は、東京大学工学部教授の染谷隆夫先生に超薄型センサーの可能性について、大阪大学心臓血管外科教授の澤 芳樹先生に再生医療による心不全治療について、前大会長でアリゾナ大学循環器内科教授のMarvin J. Slepian先生に補助人工心臓の血液適合性について、産業技術総合研究所の山根隆志先生に日本における補助人工心臓の現状についてお話しして頂いた。今回初めての試みであったが、開会式の前に“Tokyo Memorial Lecture”と題して、James Long先生に補助循環の歴史と展望について記念講演を行って頂いた。

本学術集会は約半数がエンジニアで、医師・コーディネーターなどの臨床家は4割、残りがデバイス関連企業の社員という、translational researchに軸足をおく学会である。また、数多くの賞を設けていることも特色の1つである。最優秀賞に当たるSezai Awardには国立循環器病研究センター研究所の片桐伸将先生が、若手最優秀賞であるHelmut Ruel Young Investigator Awardには東京大学医学部附属病院心臓外科の秋山大地先生が、アジア太平洋地域の補助循環研究推進のために設立されたAsia Pacific ISMCS Young Investigator AwardにはオーストラリアのPrince Charles HospitalのEric L. Wu先生が、最後にISMCS Poster Awardには国立循環器病研究センター研究所の島村淳一先生が選ばれた。4部門のうち3部門の受賞者として日本の研究者が選ばれ、わが国の補助循環研究・臨床のレベルの高さが改めて感じられた。

Gala Dinnerでは、重症心不全患者がiVADを装着しているかに充実した日常生活を送っているかを研究者に是非とも目の当たりにしてもらいたいと考えて企画を進めた。筆者と山崎先生がiVAD開発にこれから求める期待について、



図1 Opening ceremonyでの1コマ



図2 本学会伝統のテキサスハットの継承式
Dr. SivathasanからDr. Moscatoへ。

日常の診療の姿を通じてビデオメッセージで訴えかけた。クライマックスでは、iVADを装着して2020年開催の東京オリンピックの準備担当として活躍している青年、さらにはiVAD補助を経て心臓移植を受け、毎日が楽しくて仕方がないという青年の2人を、重鎮であるカリフォルニア大学サンフランシスコ校のGeorg Wieselthaler先生が会場内へエスコートしてインタビューを行うという企画で、会場が感動に包まれた(図3)。

200名を超える参加者を迎え、2019年はイタリアのローマでの再会を約束し、盛会のうちに幕を閉じた。

本稿の著者には規定されたCOIはない。



図3 感動的なGala Dinner終了後に関係者でパチリ